



# 「終わりの日」黙示録を読む前に

Rev. PがPreteristの教義に書き添え

- Rev. Pの中核は2017.7.7.7.7...
- 歴史の解釈、\*43 国国図 \*44 国国図
- 後(古)と支配 / 罪殺・悪(内外) \*45 剣
- 仮庵祭の祭儀の解説、モーセと小羊の歌、世の中心: 仮庵
- ニコライ派... 氣にしたい → 電報
- ラッパ27... エリ2、ヨハネ年
- なせ小羊? 宮廷外編...
- ヨハネに集る、ヨハネに起る。Preterist. Preterism AD70
- 終りの日 - 新約の終りの日について
- 柔い舌はヤ
- 7つの封印(巻物) - 神の心は。 - Rev 6: ≡ Mat. 24
- 7月のハットラ - 通説の最終日は最初の日

Rev. Pを読む前に...

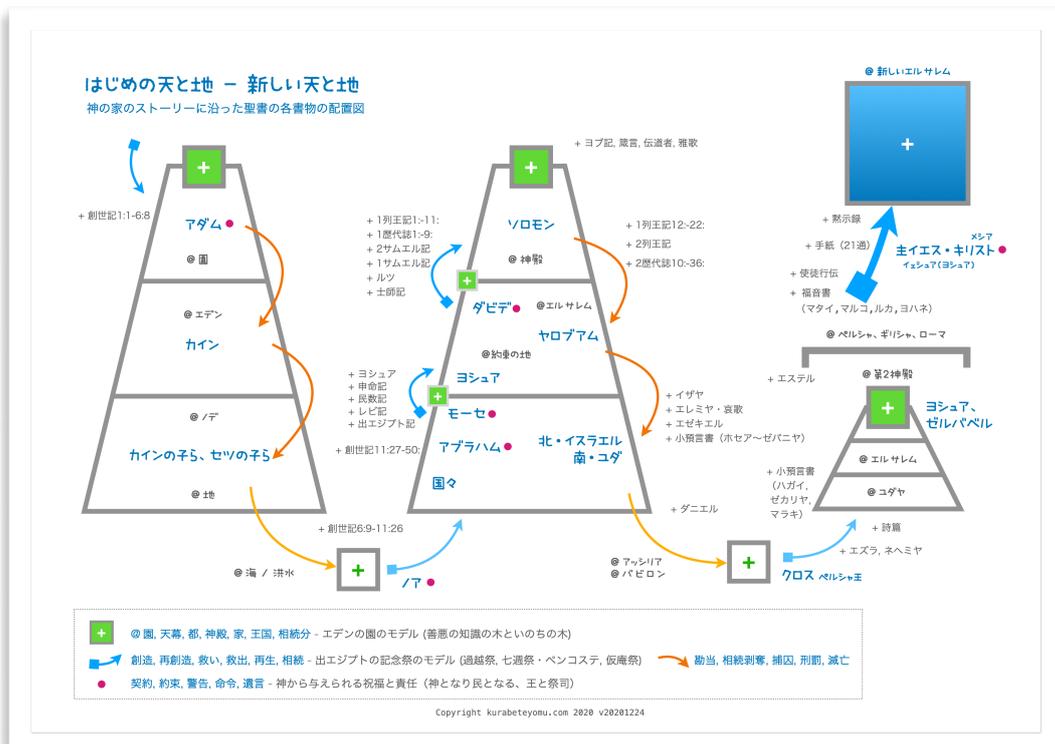
(再臨 - 使1:11)

- 終りの日、主が来る、主の日 (F12見3. Gen11:5 バベル)
- 新天新地、Gen18:21 YHWHは
- 7巻だけ、この巻は P.96,98
- 預言・予言 - 契約・約束がどうなるのか、天の国見ると80
- 象徴的表現
- 創造 - 新創造の進行
- 元々読者がいる、当時理解できるはず
- 新約に入る前のことば、はじまりに歴史をふりかえり
- 新約はゴッセルのスタート (30世紀時代の到来・卒業試験)
- AD70、一筆は、始末の
- 神の国、天の国 - 天国、地獄の
- 死んだとは... 世11:23、ルカ16:5-12、
- 終りの日、

2022.10.20

- おぼろげ
- ヨハネ1:24、213、終りの日...
- ヨハネ6: 終りの日のおぼろげ
- ヨハネ15: 奥書、終りの日
- 歴史の終り
- ヨハネ15:24-26
- ヨハネ Rev. 20:7-10, 11-15

ヨハネの黙示録、黙示録を読む前に、知らなければいけない事はたくさんあります。黙示録は、たった15ページの長さしかないのですが、この黙示録を知るためには、これだけ(全部を)知らなければいけないということです。特に不思議な言い方がたくさんありますから、幻の中を見ているようで、何を言っているのかわからない。これだけ読んでも全くさっぱり分からないという感じの書物です。創世記から始まる「はじめの天地の創造」、そして、福音書から始まるのが「新しい天地の創造」。これが主イエスキリストが来られてからの働き、福音書から始まる天地の創造の話です。この最後のところに黙示録があります。黙示録は「新しいエルサレムが来ました」ではなくて、「そろそろ来ます」なんです。その預言になっています。



このチャートでいうと、歴史がここ(創世記)から始まって新しいエルサレムで終わっているように見えるのですが、黙示録はここ(右上)ですね。聖書はこの矢印の水色の四角に入る前で終わっています。この水色はずっと歴史を通して、今も続いて完成に向かっていくということが前提になります。その「新しいエルサレム、新しい天と地が始まるんですよ」というのが黙示録です。

聖書は、結婚で始まって結婚で終わると言われます。アダムとエバのストーリーは、はじめの創造の結婚の話でした。黙示録の最後、聖書の最後も、天から花嫁が降りてくるところで終わりますので、夫であるキリストと妻である教会・花嫁、その結婚でこの書物が終わります。結婚というのは、創世記でもそうですし、普通分かると思いますけれども、結婚はゴールではないのです。結婚はスタート、新しい始まり。それが結婚ですので、聖書は結婚で終わっていますが、新しい天地の始まりのところで終わっていると教えられているものだと思います。

古い時代は、ずっと親子関係で、この子供の時代がいよいよ終わります。子供が選ばれて妻が備えられる。それが御霊が与えられた時に始まった教会。そして手紙は、結婚するまでにキリストの妻としてふさわしいものに整えられていっているという意味で、手紙は結婚する前の「結婚カウンセリング」みたいなものです。子供の時代が終わって新しい結婚がありますから、子供の時代の卒業です。卒業には試される試験があります。その試されるということが、この黙示録で書かれています。その試される日、卒業試験は終わりの日の試験です。学年末試験とか学期末試験。その期間の終わりにテストがあります。その終わりの日、古い時代、子供の時代の終わりの日にテストがあって、新しい時代が始まるということなので、そのことが書いてある黙示録に、終わりの日がどういうものなのかということが説明されているわけです。これは古い時代の終わりの日、世の終わりと書いてあるのは、その古い世の中の終わりの日のことです。歴史の終わりと古い時代の終わりが世の終わりという、アレっと思ってしまうと思うのですが、特に主イエスキリストが世の終わりについて預言している箇所が、マタイ福音書24章、25章にあります。「あなたが来られる時、世の終わりにはどうしようもありませんか」という質問を弟子たちがします。「主が来ること、そして世が終わること」これが24、25章で書かれています。ですから、主が来る日、世の終わりの日、これについていよいよ来る、その前に戦いがあるということが黙示録に書かれます。

ずっと見てきた21通ある手紙も、世の終わりに向かっている教会を励ましていますから、「世の終わりの日がこうですよ。その終わりの日の望みを待ち望んで忍耐しなさい」というのが手紙です。世の終わりの時、古い時代が終わって、新しい時代になる。その新しい時代はどういうものかということを経験の中でも教えられている。その新しいエルサレム、キリストの妻にふさわしいものになるようにテストされていますので、そのテストの中に新しいエルサレムはどういうものかということが表されているということになります。

「主が来る」というのは前にやりましたね。パウロは主が来るという言い方を使って、福音書とユダヤ人向けの手紙の中では「終わりの日」という言い方を使ったりしています。旧約聖書の中に「終わりの日」という言い方はなくはない。「主が来る」という言い方はたくさんある。「主の日」という言い方もされます。「その日には、その日には」という言い方で、主の日、さばきの日のことを主の日と呼びます。天から神様が降りてきて見る、さばく。特徴的なのがバベルの塔のさばき。そしてソドムとゴモラのさばき。バベルの塔はバビロンの塔です。バビロンのはじめはバベルです。ですから、黙示録で大バビロンと言われたりしますし、ソドム、ゴモラのさばきを思い出す火のさ

ばきがあつたりします。その両方とも神様が天から降りてきて、この世を見るというところからさばきが始まっています。

「主は見て良しとされた」というのが創造でしたね。創造の7日間、そして7日目はわざを休んで全てが聖であると宣言されます。ずっと創造の中で、見て良しとする、見て良しとする、見てさばいてる。そして最後に、「全てが良い」と宣言するというのが創造でした。新しい創造も同じように、神様が来て見て、さばいて新しくするということが言われます。ですので、「主の日、主が来ること、終わりの日」これは神様が雲に乗ってさばきが来ると言った時に、孫悟空のように雲にキリストが乗ってくるというよりは、神様が来ることがその雲を見るとわかるという象徴的な言い方になっています。預言の言い方がたくさんあります。預言書的な馬、白い馬とか、赤い馬とか、7つのラッパが何かするとか、象徴的な言い方がいっぱいあります。その象徴の表現は、黙示録の中に突然出てくるものではなくて、古い時代の預言書イザヤ、エゼキエルとか、特にゼカリヤなどの中に出てくる言い方を指したりしていますので、白はこういう色だからどうだとか、赤はこういう色だからというのではなく、その箇所を思い出して連想しないといけないという意味で、象徴的表現というのは連想すべきところを正しく連想しながら読んでねという表現です。それが象徴的な表現なのだと思います。預言書の中で、預言がそのそのままわかるように書かれているものが、例えば「エルサレムのこの場所になんとかさんが来たならば」とは書かないで、「荒らす忌むべき者が現れたら」といったらダニエル書の言い方、ダニエルはこのこと言っている。そのことを思い出してその出来事を悟るように書かれています。

元々、この黙示録には、もちろん読者がいます。当時この時代の小アジアにいる人たちです。その人たち向けに書いてありますから、その人たちが理解できるはずの書き方です。何を言ってるのかピンと来ないのだったら、「これはすぐに起こることです」と言っている励ましの言葉なのに、全然励ましになりませんから、元々の読者は理解できるはずの象徴でした。これは今言ったように、すぐに起こるはずのこと、そして最後にも「預言者たちの霊が…すぐに起こるべきことを示しました。私はすぐに来る。私はすぐに来る。アーメン」これが、黙示録の出だしと最後に書いてあります。すぐに起こることを言っている。永遠の先のことを言っているというより、その人たち向けに、このことは今すぐ起こりますよという話をしています。

それは、いつなのかということは、黙示録には論争がたくさんあります。いつ書かれたのかがすごく大切になるのです。これは90年に書かれた。いや、60年に書かれた。ここで言っている大バビロンは、この出来事を言ってる。この国のことを言っている。いや、エルサレムのことを言っている。ローマのことを言っている。いろんな議論があります。つまり、それによって解釈が変わります。その解釈するときの大切な出来事は、AD70年のエルサレムのさばきです。古い時代の一番の中心、一番聖い場所は、至聖所、聖所。その聖所がさばかれて、それ以来、今に至るまで、その神殿は再建されていません。ということは、古い礼拝制度はもう終わってしまった。もう復活させることができません。今のユダヤ人たちはユダヤ人として行動することはできないのです。もう生贄は捧げられないし、祭司は誰だか分からないしということです。そのAD70年の大きな大きな出来事について、ずっと聖書の中では、至聖所、聖所がどうなってるのかということが、ストーリーの中心でしたよね。至聖所から追い出されて、国から追い出されて、もう一度聖所ができるまで。またそこから追い出されてという出来事です。最初のエデンの園、その園がどうなっているのかが中心の話題ですので、その聖所が破壊され、無くなったということは、この本の中で一大事件です。一大事件というよりも、もうそのものが終わってしまったかのような出来事です。その話は、「何も意味

がないような出来事になってしまいます」というぐらい中心の場所が破壊されたというのが、AD70年の出来事です。

それは聖書外の書物、ローマの記録とかでもはっきりしているさばきになっています。聖書外の記録によって、この黙示録はいつ書かれたのかというのを確かめるというのは普通にやることです。「教父たちが黙示録を引用したのが、ここにありますが、ここにありますが、それは何年に書かれました、その人は何のことを言っていると書いています」みたいのからずっと見て、黙示録は90年に書かれたに違いないとか言ったりするのですが、聖書の文脈から言ったらどうなのかということは、無視されたりするので困ってしまいます。70年よりも前に黙示録が書かれたというのが、私たちが見ている立場です。そうすると、この黙示録に書かれていることは、おもにAD70年の古い神殿のさばき、古いイスラエルがさばかれたということをおもに話しているさばきのことだろうということです。AD70年のことと黙示録の書いてあることの並行と見ているわけです。既に起こった。私はすぐに来ると言っていた。そして世が終わると言っていた日。これはもうすでに70年の時に起こりましたというのを、日本語で過去主義と言ったりします。プリテリズム。それを信じている人をプレテリストと言います。プレテリストということで見た時には、黙示録のほとんどの部分は、70年の時に成就しています。その後の話も書いてないことはないけれど少ないです。

「歴史の終わりの日によみがえることを知っています」というのは、マルタも言っていますよね。古い時代の世の終わりとは歴史の終わりは、似ていることは似ています。ずっと主の日があったのですよね。ノアの日も主の日、創造の7日目も主の日、ソドムとゴモラの日も主の日。さばきの日、神様の大きなさばきの日、約束に従わなかったが故のさばきの日、それは何度も何度もありますから、それはオーバーラップして重なっているような感じです。その一番のさばきの日は、古い時代のさばきの日、そしてそれは、歴史の終わりのことを表している。歴史の終わりのさばきが歴史の真ん中に表されているというような言い方になりますかね。さばきの初穂みたいな感じ。復活の初穂がキリストで、歴史の終わりにみんな復活して神様の前にさばかれます。それは黙示録21章にあります。初穂のよみがえりと第1の死の話と、第2の死の話とよみがえり。いくつか見なければいけない箇所があります。ヨハネ福音書6章に終わりの日のよみがえりが何度も書かれています。「善人も悪人もよみがえってさばかれます」が5章にあります。第1コリント15章に「終わりのラッパの時に」と言っていてさばきの日の話をしますね。そこにキリストは初穂としてよみがえったという話があります。歴史の終わりの時のさばきの話は、第1コリント15章24節から26節は、歴史の終わりの話かなと。そのことと並行しているのが第2の死の話だと思われま。ですので、この黙示録は、古い時代の終わり、その裁きの日。だから、新しい時代の始まりの日。古いものが終わらないと新しいものは始まりません。小学生のまま中学生にはなりません。中学生のまま高校生にもなりません。前の時代が終わる。結婚するのもそうですね。父親の下に娘がいて結婚したら、今度は夫の下にいて言う形に変わりますよね。その変わってるのに変わってないかのようなものは問題になるわけでしょう。その前の時代が終わるということがないと新しい時代が始まりません。始めの創造が終わって、新しい創造、この時に古い創造の終わりの日というのが書かれています。ただ、まだ神様が最初に作った地球は、そのまま残っていますから、古い創造は残ってはいますけれど、始めの意味ではもう終わったということかな。始めの目的は果たされた。その目的はさらに新しい創造で果たされる。次の新しいレベルで果たされるという意味で、既に新しい創造が始まっているということで、「古い時代の終わりで新しい時代の始まり」というのが大切な区別です。古い時代の終わりの日についての書物というのが、いよいよ来たよが福音書から黙示録ま

での新約聖書というのは、基本的には古い時代の終わりの日、新しい時代の始まりの日を表しているということになりますね。

死んだ後どうなるのか。死んで天国に行くという表現はないのですね、聖書の中に。「死んだら天国に行く」は、どこかで間違った表現になっています。死んだ後「キリストとともにいることとなります」みたいな話がありますけれど、天国に行くということではない。「天の御国」と言った時には、天のモデルがこの地上で表されている国のことを「神の国」という言い方をしますので、死んで天国に行くわけではないということはお話しておきます。死んだら、歴史の終わりを待っているという状態です。歴史の終わりの後に、また新しい場所に入るような感じですかね。新しい天と地が完成した状態の後、どうなっているのかはよくわかりません。あまり書いていませんけど、そういう時代が来ることは言われています。

7だらけなんですよ黙示録は。7・7・7・7・7・7・7。これは完成の7。最初の7日目が聖なる日、完成を表す7日目だったように、7日目、7週、7月、7年、49年、490年と、ずっと7の完成の度合いがどんどん進んでいく。ヨベルの年はラッパを鳴らして祝う年。約束の地に入ったエリコの戦いもラッパを7回鳴らすというようなことがあって、その7回鳴らすラッパの話も黙示録に出てきます。完成の完成の大完成のようなヨベルの年は、自由の年、恵みの年と言われますよね。その年の成就の書物ですよ。だからハレルヤという大合唱、アーメンの大合唱が、この黙示録の中で書かれているわけです。その完成の完成の完成という意味で7がたくさん出てくる。仮庵の祭りの成就ですということをお話しているところですが、仮庵の祭りは7月の祭り、異邦人も集まってということですよ。全世界が集まって主の御名をほめたたえる日。そして一緒に食べて交わるシャロームの日、本当の安息の日。それを喜ぶ日が仮庵の祭りということですので、仮庵の祭りの成就ということは何箇所かに出てきます。

その仮庵の祭り、約束の地に入るという前には、大きな戦いがあります。もう1回ヨルダン川を渡らないといけないですけども、その前に申命記が与えられて、約束の地に入った時にはこうしなさいと言われて、申命記が与えられます。この黙示録は、申命記みたいな役割にもなっています。それで福音書が出エジプト記ですね、過ぎ越しの祭り。使徒行伝がペンテコステですよ、レビ記。手紙は民数記の時代。黙示録は、いよいよ入る前の申命記というように、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記の時代のような役割をしていると思います。黙示録は、これからいよいよ入るよという時にもう一度、約束が新たにされて、モーセの歌が書かれています。モーセの歌と子羊の歌が15章にありますけれど、申命記32章のモーセの歌からの引用です。申命記の最初のところ、4章までには、あなたがたは連れ出されてこうでしたよねという歴史を振り返る箇所があるんですけども、7つの手紙が歴史の要約のような形になっています。実際に7つの教会の問題を取り扱っている手紙ですけども、どうもグルンと回って、ローマの道順に町が配列されてるような感じです。結構ローマの中でも大きな大切な町だったようです。その町のそれぞれの問題を取り扱っているんですけど、その町の教会の問題が、イスラエルの古い時代を取り扱っているような感じになっています。そういう意味で、申命記の最初の歴史を振り返るのにも似ているということも言えると思います。

その黙示録には7つがいっぱいありますけれど「幸いな者よ」で始まります。幸いな者よも、実は7回ある。7回あるよということがわざわざ言われているとは思わないんですけど、数として7なのは面白いですよ。この預言の言葉を朗読する者とそれを聞いてそこに書かれていることを心に留める人々は幸いである。時が近づいているからである」というこの幸いで始まって、最後は「預言の言葉を聞く全ての者に証しする」という箇所があります。「自分の着物を洗って、いのちの木の實を食べる権利を与えら

れ、門を通過して都に入れるようになる者は幸いである」これが最後のところですね。もう一個あります。その箇所直前に「私はすぐに来る。この書の預言の言葉を固く守る者は幸いである」と言って、幸いが7回あります。神様の祝福を表す言い方、祝福を与えられる者、神様から与えられるその祝福を受ける者が幸いな者と呼ばれますけどその幸いな者が7回あるのは興味深いと思います。

あとは7つの封印というのがあります。巻物が7重になっている感じです。1つの巻物に7つ封印があってもしょうがないですね。7重になっていて、封印を1つ解いて読んで、次の巻物を解いて読んで、という形になっていると思います。その7つの封印が書いてある黙示録6章の「第1の封印を解くと、第2の封印を解くと」と書いてある箇所が、マタイ24章のオリーブ山の説教で、こういう裁きが来ますよと言われてる箇所と、順番が同じでそこで説明されているのは興味深いです。そういうことからわかるように、エルサレムのさばきについての預言の成就の箇所ということで黙示録を見なさいと言われてるものなのだろうと思います。これは今のユダヤ人の、今のかな、聖書の中には書いていないけれども、ユダヤ人の伝統として守られているのが、7月のシムハットトーラーと言って仮庵の祭りの最後の日が聖書を読む日なんですね。聖書を読む日なんですけど、聖書を読むのが1年の通読のサイクルがあって、その日に通読の最後を読む。そして最初を読む。申命記の最後を読んで、同じ日に創世記の最初を読む。終わりの日と最初の日が、新しい年の初めの日がかぶさってるような感じです。そのシムハットトーラーという日という名前を見ても、この終わりの日というのが新しい始まりの日ということが分かります。

旧約時代の主の日、さばきの日を見て、今この手紙を送られた人、黙示録が送られた人たちもその古い時代のさばきを覚えて、神の国が来ますとバプテスマのヨハネが言いますよね。神の国が来るということを見る時に、今までの出来事としての主の日、さばきの日を覚えてその日を迎える。どう歩めば良いのかが分かっていますよね。悔い改めて。そういうものですので、御霊が与えられた後に新しい聖書の部分は加わっていませんが、御霊が与えられてこの全体を理解することができるようになっています。ですから、今の私たちも同じようにこの古い時代がさばかれて、新しい時代が建て上げられているということが、私たちの毎日の歩みの基準になりますし、どこを目指しているのかということもここから教えられているものですので、旧約時代の預言も、すでに起こったことだから預言に意味がないということではなかったわけです。同じように、既に起こったことだけれど、私たちがどこに向かうのかということを確認なものとしてここに教えられている。歴史の証明付きで教えられているというのがこの黙示録という書物になるのだと思います。

AD70年のさばきの時には、キリストはどこにいたのか。雲に乗って現れたのかという話なんですけれど（そうではない）。このさばきの日がなければいけないのは、黙示録の出だしで、ヨハネは「神のことばとイエスキリストの証し、彼の見た全てのことを証した」と言っているように、神のことばとイエスキリストの証しの書物なんですよ。何を証しし、証言しているのかというと、キリストは「天の御父の右の座に着いている」ということが証しされた。復活した、復活しました。天に昇りました、はい。右の座に着きました。「右の座に着いていることが見えます」とステパノが言っていましたよ。使徒行伝7章56節「見なさい。天が開けて人の子が神の右に立っておられるのが見えます」これは証言なんです。十字架にかかったイエスは神の子であった。神の子は、復活して天に昇って御父の右の座にいる。これがメサイアだということなわけですよ。御父の右の座にいるという事がどうやってわかるかと言ったら、約束の預言の通りにエルサレムを天から来てさばきましたよ。これがキリストが御父の右の座にいると

ということです。私たちと共にいる御霊を送ってくださったことによって、忍耐をもって耐え忍ぶならば、勝利を得ると言われた勝利の日なのです。AD70年が。天の右の座に座っているキリスト。そしてキリストを信じている者たちは死なない、滅ぼされないということによって、全てをキリストが支配しているメサイアである。そしてその妻は教会であるということが証されたのが、AD70年のさばぎということです。

ちなみに、「歴史の終わりはいつなんですか」ということですが、わかりません。明日じゃないないことは確かですし、数十年以内に来るとかそういうことではない。御国が完成するという日なので、まだまだ時間がかかると思います。ただ、一人一人、自分にとってはどうなのかと言うと、すぐです。ルカ福音書16章にラザロの話がありますね。あれはたとえ話です。アブラハムの懐にいる。キリストと共にいて、反対側の悪人側のところが見えてみたい。そういう状態にはならないと思います。死んだら眠ると書いてあるように、昏睡状態みたいな感じですかね。たましいと身体が寝ている。キリストのところで平安に寝ている状態で復活の日を待っている。そして。復活の日が歴史の終わりの日ですね。その日に復活してさばかれますけれど、死んでから復活するまでは昏睡状態ですので、死んで目が覚めたら最後の裁きの日ということになります。ですから、それぞれにとっての終わりの日は、すぐに来ます。